



# まちづくり ひろしま

被爆100年(西暦2045年)の姿をめざして

第11号(平成26年5月15日)

読者数：472名(募集中)

メールアドレス：[hirosima.idea.c@urban.jp](mailto:hirosima.idea.c@urban.jp)

〒733-0002 広島市西区楠木町1-9-7

発行人：前岡智之、編集人：瀧口信二

配信元：広島アイデアコンペ実行委員会

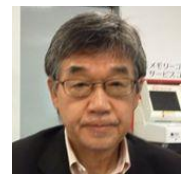
ご提案・ご意見等は、こちらまで

## □巻頭言

### RCC文化センタービル全面改修から10年

～「水の都ひろしま」構想、実践例のひとつとして～

中国放送OB  
編集委員  
三宅恭次



#### ☆「水の都ひろしま」構想

この構想は1990年に国・県・市が共同で「水の都整備構想」を策定、3者がそれぞれの立場で都心部の美しい水辺形成に取り組んできました。この構想は都市の水辺での新たな楽しみ方を創り出すこと、都市型観光の主な舞台になること、水辺にふさわしい個性的で魅力ある風景を創り出すことを目的に進められたもので、構想推進に当たっては周辺の町内会、企業、NPOなども協力してきました。策定から四半世紀、六つの川(太田川放水路を含む)の川辺は美しく整備されました。

#### ☆RCC文化センタービル全面改修

広島市中区橋本町、京橋河畔にあるRCC文化センターは2003年に築32年を迎え、老朽化が進んできたため、建て替えか全館リニューアルかの検討の末、全面改修をすることになりました。

全面改修の設計に当たって、文化発信するに相応しい“顔”作り、貸会議室を主な事業としていたため十分な採光による明るいスペースの確保、そして行政の理解を得た上でのことでしたが東西両方向から出入りできること、この3点をコンセプトに進めました。特に西側の一般道路側から河岸緑地側への“通り抜け”は是非とも実現したい点でした。ただ、河岸側の文化センターの所有地は建物から約1m幅しかなく、官有地の「掘り込み」許可がなければできない相談でした。設計に当たった宮森洋一郎さんは「恐らく許可してくれないだろう」ということでした。しかし、文化センターにとって幸いしたのが「水の都構想」が具体化に向け動き出した時期と重なっていたことでした。

広島市などは「水の都構想」推進に当たって、RCC文化センターのある京橋川右岸地区を「オープンカフェ通り」のモデル地区と位置付けており、JALシティホテル、ホテルフレックスと共に文化センターは「カフェ通り」実現のための拠点の一つとして期待されていたのです。

当時の広島市都市政策部は公共空間の改修を伴う設計案について、その実現方に理解を示し、市の関係セクション、河川管理者である県との調整に当たって下さり、2003年12月に正式許可が出、翌2004年2月に“通り抜け通路”(フットパス)と河岸緑地のカフェスペースの完成を見たのです。その後、エレベーターの新設、6、7階の会議室スペースの全面改装などを経て2005年2月に完成しました。



京橋川からの全景



川沿いのオープンカフェ

フットパスは間口7.3m、奥行き26mのスペース、河岸側に出ると踊り場状になっており全てウッドデッキで敷き詰められています。緑地側はミニコンサートも出来、テーブルと椅子も数脚置いてあり、市民の憩いの場となっています。フットパスは広島市との約束で、文化センターが開いている時間帯は「通り抜け自由」の“準公道”です。設計の宮森さんは完成当時「建物の外部を容積率の関係から、公開空地にする例はあるが、ビル内部を公開空地にしている例は恐らくなく、画期的なことである」と話しています。

#### ☆当時の秋葉市長、「市長日記」で評価

完成当時、秋葉市長が市の広報誌の「市長日記」でこの事業を次のように評価しています。

…RCC文化センターのリニューアルは民間企業の先見性・独創性・スピード等を生かして、結果的に、広島市のまちづくりの考え方を先取りした事業…。

また、フットパスについては、…市民に一般公開、オープンカフェ、また芸術活動のための舞台が設置できる空間も確保して川辺での文化創造の一翼を担ってくれる等、「水の都ひろしま」の実践例…。全面改装について、「建物そのもののリユース構想の先取り」と。さらに河岸緑地側が人通りも多くなったため治安も良くなり、「破れ窓」理論に基づく「減らそう犯罪」運動の具体例だ…等々と評価しています。

#### ☆水辺から新たな街づくり

冒頭述べたように「水の都構想」策定から四半世紀が経ち、水辺は見事に“整備”されました。しかし、目的とするところの「新たな楽しみの創造」「観光の主舞台」「個性的で魅力ある風景」の実現にはまだ至っていないのではないのでしょうか。言うならハードは整ったがソフトがまだまだ不十分！というところでしょう。かつて、あるマスコミの調査で広島都心の最も好きな場所、風景の第一に「川と水辺」が上げられていました。市民の潜在意識には川と水辺に親しみたい、また誇りにしたいという思いがあるということでしょう。そのためには市民にもっと自由に河岸での花壇づくりなどを認めてはどうでしょう。

広島市は市街地の公有水面の面積と橋の数では日本一です。見方によれば街の阻害要因にもなる川と橋を活かしたオンリーワンな街づくりこそ今必要であると思います。

半径5キロ範囲に山、川、海が収まっている全国でもまれな自然豊かな大都市、太田川が6本の川に枝分かれする大芝水門から河口まで信号で止まることなく自転車で行ける街(まだ実現できていないがアンダーパスの整備)、日本一の乗降客数の路面電車…、旧広島市内デルタ地区をスローライフタウンに！！人は当然のことながら動植物にも優しい街になることを願うものです。

#### ひろしまのまちづくりの動き

#### ○サッカー場建設5候補地に絞る！

第10回サッカースタジアム検討協議会（※）が3月26日に市役所で開催され、4月10日に中間報告書を知事、市長に提出。5か所の候補地と複合型施設を提案。今後、秋の最終報告に向けて、候補地の更なる絞り込みと規模や財源等の管理運営方法等について検討する。そのために市民の意向調査やスタジアム建設に伴う経済波及効果等の分析を専門家に依頼する。

建設候補地 ①中央公園自由・芝生広場、②旧市民球場跡地、

③広島みなと公園、④県営広島西飛行場跡地、⑤広島広域公園

※検討協議会は広島県、広島市、広島商工会議所、県サッカー協会が合同設置したスタジアム建設について話し合う有識者の協議会

#### ＊コメント＊

昨年の6月に第1回目の検討協議会をスタートさせ、10回目で候補地5か所に絞り込んだのはスローペースと言わざるを得ない。そもそも広島広域公園は他都市のスタジアムと比較して交通の便が悪く、サッカースタジアムとしても相応しくないのも、利便性の良いところに専用スタジアムを建設したいというのがスタートラインだったはずである。広島広域公園を残しているのは地元住民の移転反対の声を反映か。



TSS テレビ (3月27日放映)

旧市民球場跡地は利便性が最もよく、何を誘致しても成功の可能性が高いが、サッカースタジアムである必然性は低い。そこは特定の同好グループに限定される使われ方をすべきではない。市民球場でさえ立ち退いたところである。

検討協議会としては、この2か所を除外するのが妥当と思う。ただ、広域公園のビッグアーチからサッカーの試合を除けば、その存在価値が希薄となることも確かである。また、アストラムラインが西広島駅まで延伸すれば、交通の便も改善される。検討協議会とは別の次元で判断が問われているのではないか。

なおサッカースタジアムの建設地については編集委員の間でも議論が分かれるところである。検討協議会は近々市民アンケートを行うようだが、くれぐれも幅広い市民の声が反映されるように留意願いたい。一時的なムードに流されるのではなく、その立場の人が全責任を負って英断を下すべきである。（編集委員 瀧口信二）

## ○時代を語り建築を語る会（第4回）：山木靖雄氏

時代を語り建築を語る会実行委員会（代表者石丸紀興）により、広島における都市計画系コンサルのパイオニアとして1973年にLAT環境設計事務所を開設した山木氏を招いて、その足跡を語る会が催された。

- ・開催日 2014年3月15日（土）17時15分～
- ・会場 広島市まちづくり市民交流プラザ

### <話の概要>

山木氏は現在、広島県議会議員として活躍中だが、今回は議員に転身するまでの話が中心で、以下、要点を記す。

- ・代々続く家業の造園屋を継ぐために造園学科を有する千葉大に進学。日本庭園を志望したが、庭園学の先生が不在のため卒論は自然公園・都市公園にテーマを変更。その過程で建築学の必要性を痛感し、大学卒業後、広大建築学科の研究生となる。そこで2級建築士の資格を取得し、自分の造園設計理論を確立する。
- ・ランドスケープ・アーキテクチャの事務所に興味を抱いたのは、昭和39年の東京オリンピックで、都市公園の中に建つ多くのスポーツ施設を見た時だ。造園と建築を融合したコンサルとして、昭和48年にLAT環境設計事務所を設立。初期の頃、安芸地区の憩いの森基本計画や三原の運動公園計画等を行い、植物を扱う自然公園的な仕事を得意分野とする。
- ・代表作品となる呉市蔵本通り造園設計では昭和62年度の日本造園学会賞を受賞。全国で初めての都市景観形成モデル事業として、河川、公園、街路を一体的に整備し、都市のシンボル性とオアシス空間を創出したことが高く評価された。

現在は、呉みなと祭が蔵本通り一帯で行われ、呉市の「顔」として象徴的な景観となっている。また、市民の声を活かして整備した「赤ちょうちん通り」の屋台も好評である。

- ・都市計画系コンサルが誕生するのは昭和40年代半ば頃から。それまでは行政からのニーズに大学等の公的な機関が応えてきたが、大学紛争等の動きでストップする。代わりに民間プランナーが育ち、山木氏は広島における走りといえる。今は新しいまちづくりや再開発等の動きも下火となり、都市計画系コンサルの仕事も落ち込んでいる。発注者は行政が主体だから、行政・大学とも連携して新しい考え方を創出していく必要がある。

### \*コメント\*

今回の話で、山木氏がコンサルを目指した経緯はよくわかったが、県会議員に転身する理由は触れられなかった。どちらも広島のまちを良くしたいとの思いであろう。コンサルの役割も時代と共に変化するが、未来のまちづくりに対して持てるノウハウを存分に発揮してもらいたいし、市民もコンサルを十分に活用してもらいたい。（編集委員 瀧口信二）



略歴：1943年広島生まれ、1966年千葉大卒、1969年広島県商工部観光課、1973年LAT開設、1987年県議会議員、現在に至る



呉市蔵本通り



## ○広島川のまちづくりを考えるワークショップ

### 『つかう・つくる・つなぐ～基町環境護岸の30年』

基町環境護岸の設計者である中村良夫氏（東京工業大学名誉教授）、北村眞一氏（山梨大学大学院教授）と一緒に基町の水辺を歩き、会場に戻って「作り手×使い手」について議論するワークショップに参加した。

・開催日 2014年3月15日（土）14時～17時

・会場 広島グリーンアリーナ中会議室

#### <話の概要>

- ・デザインの主旨は機能性と安全性と広島の風土を追求。広島らしさを出すために花崗岩を使う。
- ・水辺は街と川をつなぐファジーな空間であり、形のデザインだけでなく、事のデザインが可能とする布石を打つ。水辺の芝生にポプラを残したことにより、広島の復興の象徴としての水と緑に対する熱い思いが生まれ、**ポップラ・ペアレンツ・クラブ**（\*）の活動が生まれた。

- ・水辺は縁のデザインであり、日本建築の縁側に通じる。座敷があり、縁側があり、庭がある。縁側は庇の軒下に合った踏石、犬走、溝（砂利）、庭へとつながる。

水辺と川の関係は答えが見えてきたので、これからは縁側と座敷とのつながり、即ち、水辺と街との関係が課題となる。

\***ポップラ・ペアレンツ・クラブ**は2004年の台風18号で倒れた基町環境護岸のポプラの木の再生を応援する企業と市民グループと有志が結成。基町ポップラ通り（基町環境護岸の愛称）の清掃、除草、雁木掃除などの世話をしている。

#### \*コメント\*

設計者が形を作り、使う人が場を作る。両者が一体となって初めて基町環境護岸の景観が完成した。山木氏の呉市蔵本通りとも共通する。景観に限らず、公共空間の設計の在り方を再認識した。  
(編集委員 瀧口信二)



## □ほっとコーナー

### 『スキューバダイビング』

服部幸雄（服部設計室社長）

50の手習いという言葉があるが、本当に50歳になってからスキューバダイビングを始めました。学生時代に興味を持ったのですが、私は泳ぎが出来ないのであきらめていました。50歳になって娘と一緒に始めようと言い出したのでやってみることにしました。泳ぎは水に浮かなければいけないのですが、ダイビングは水に潜るのですから浮いてはいけないわけです。これならできると頑張って、Cカード（講習済み証）を取得しました。

海の中で1時間近く潜ったまま海中散歩が出来るのは本当に楽しいものです。ハワイやグアムで潜ったときには、ウミガメが遊びに来てくれ一緒に遊んでくれることもありました。まるで竜宮城に連れて行ってくれるような気になります。ダイビングをするというと貝や魚を捕ってくるように思われがちですが、大部分のダイバーは、海の中を見ることで満足しています。カメやマンタのように大きなものからコイワシの群れや体長が1cmか2cmの小エビのような小さなものまで、海の中はいろんなものがいてダイバーを楽しませてくれます。海の中は危険も付きまといますが、これからも体力が続く限り世界の海で続けたいと思っています。



## ○広島の復興の軌跡（第6回）・・・本通の成り立ち

本通は広島市の都心に位置し、周辺にはアストラムライン・バスターミナル・市電等が集中している。週末には約10万人の来街者で賑わう中・四国一の商店街で、広く市民に親しまれている。廃墟から立ち上がり、いかに復興し、現在の姿に変遷してきたかをたどる。

### 1. 戦前の賑わい

江戸時代、本通は広島城下を横断する西国街道（山陽道）の一部で、革屋町や播磨屋町、平田屋町など、当時の名残の町名が昭和40年まで残っていた。

大正元年に市内電車が開通し、本通商店街の形成を促す。昭和5年に本通会が発足し、繁華街の中心が中島本町から本通に移行する。通りの両側に続くすずらん燈は夜の本通を輝かせ、広島の名物として道行く人々の目を楽しませた。

### 2. 被爆後の状況

被爆当時の本通には商店以外の銀行・郵便局・事務所・映画館等があり、今とは少し趣が違っていた。原爆投下により爆心地に近い本通は、コンクリート造りの建物を除いて壊滅し、瓦礫の下には多くの犠牲者が横たわっていた。

本通のシンボルだった下村時計店の時計塔は爆風を受けて崩れ落ちた。帝国銀行広島支店や大林組広島支店の建物はかろうじて形を残し、修復して戦後も生き残る。

### 3. 目覚ましい復興

昭和21年にはバラックの10店舗が集まって本通の復興発起人会を立ち上げ、昭和23年に広島本通商業協同組合を発足。

土地区画整理は昭和21年に事業決定し、翌年から事業に着手。道幅が7.2mから11mに拡張され、すずらん燈も復活し、昭和24年から電柱の撤去も開始される。

戦後の価格統制が廃止され、広島駅前等のヤミ市が次第に姿を消して、昭和25年頃には本格的な賑わいを取り戻す。昭和29年には初代アーケードが完成したが、翌年の積雪被害で倒壊する。

昭和33年の時点で、戦後創業した店舗が過半数を占め、本通の復興は老舗の力を基盤としながらも、他の地で力を蓄えた商人の手でなされたといえる。

昭和40年に広島市内の町名変更がなされ、商店街の通称として使われていた「本通」が行政区画の正式名称となる。それを機会に無名時代の由紀さおりが歌うコマーシャルソングが作られ、「歩いて楽しい本通」のメロディがよくラジオから流れていた。

今の本通のランドマークは「広島アンデルセン」である。戦前から建つ被爆建物三井銀行広島支店（被爆時は帝国銀行広島支店）を改装して昭和42年にパンとレストランの店をオープンする。

### 4. 現在の本通

3代目のアーケードが平成3年に完成。歩道も平成5年にカラー舗装となり、本通は現在の姿となる。

その頃から老舗の店が1階から2階へ移るケースが増えていく。土地の所有者はビルの建て替え時に路面店を貸店舗にして家賃収入を得る。家賃が高いため、資金力のある大手チェーン店の進出が相次ぐ。結果として、コンビニやカラオケ店やパチンコ店が現れ、かつての高級専門店街のイメージが次第に薄れていく。

また郊外の大型ショッピングセンターに客が奪われ、中心市街



昭和10年頃



現広島パルコ付近より西を望む。写真左が下村時計店（林重男撮影）



昭和24年、道路が拡張されたが、電柱は残る  
(佐々木雄一郎撮影)



昭和28年、賑わう本通  
(佐々木雄一郎撮影)



広島アンデルセン旧館



地の地盤沈下が叫ばれて久しい。危機感から本通周辺の商店街と大型店による広島市中央部商店街振興組合連合会（中振連）が平成4年に結成され、対策等に取り組む。その成果の一つとして、商店街と市民が連携したまちづくり機関、NPO法人の「セトラひろしま」が誕生する。

アンテナショップとして県内の特産品の展示販売等を行う「ひろしま夢プラザ」が平成11年に本通に移転し、今は本通で最も集客力があると言われている。

平成19年にオープンした「本通ヒルズ」は老舗の2店舗が共同ビルを建設して、うなぎの寝床を解消した明るい話題だ。地下1階にレストラン、1・2階はテナントに貸し、3階に老舗の2店が入り、4・5階は病院、7階はカフェが入居する複合ビルに生まれ変わった。

現在、中振連とセトラひろしまが協働して、ゆかたできん祭、8月6日とうろう流し、えべっさん等の祭りやイベントを実施して、中心部の賑わいづくりに寄与しているが、抜本的な対策は、かつてそうであったように、「歩いて楽しい本通」にすることである。

本通商店街の裏通りにあるうらぶくろ商店街では若手店主が出資して、まちづくり会社を設立し、中心市街地の活性化のためにイベントの開催や不動産管理に挑戦しようとしている。

本通に残る唯一の被爆建物、広島アンデルセン旧館も建て替えを含めたりリニューアルが検討されている。一企業の発展を優先すれば、解体・建て替えになるし、広島のまちのことを考えれば、保存活用となる。両者の要求を満足させる解決策が導き出せるか。

世界的な観光名所、原爆ドームと平和公園につながり、これからの可能性を秘めた旧市民球場跡地と中央公園に隣接する本通のプライドと憧れを取り戻すために、本通全体を取りまとめるまちづくりのプロ、総合プロデューサーの登場が期待されている。

（編集委員 瀧口信二）

（主な参考文献）

1. 広島新史・都市文化編（広島市）
2. ひろしま本通物語（井川樹著）

## ○アイデアコンペの中から提案！

当面、2011年に行った広島市中央公園アイデアコンペの提案作品の中からこのエリアを考えるうえで貴重な提案、アイデア等を紹介していく。

### ・作品番号28「安らぎと活気のある空間」

公園にはいろいろな用途があるが、都心の一等地にあるこのエリアは昼の顔と夜の顔を持ち合わせているのがよい。

昼はいわゆる公園、夜は集客が見込める公園を提案する。

まず木々を植えて森を作り、その中に小道を作りベンチを置いて、人々が遊んだり寛いだりできる公園としての機能を持たせる。夜は一転して、屋台が軒を連ね、毎晩もしくは毎週末が縁日のような空間が生まれる。

屋台は、ある場所はアジア各国の料理、ある場所は南米各国の料理といった、中央公園に行けば食文化の地球一周ができるようにして人を呼び込む。

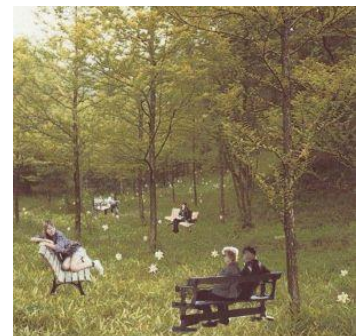
公園としての安らぎと都心の活気を昼と夜に分けて、両方を獲得しようという斬新な提案である。

**\*提案者：吉岡佑樹氏（当時広島国際大学4年生）\***

連絡がとれないためコメントは省略



現在



昼のイメージ



夜のイメージ

## ○人物登場：若狭利康氏（NPOセトラひろしま理事長）

セトラひろしま事務局に隣接する会議室で取材する。途中、テーブルの片隅でやかんが沸騰し始め、若狭さん自ら紅茶を入れながらインタビューに受け答えする。その柔軟性とサービス精神に感心した。

### ☆生まれ育ちは

祖父が赤穂から広島に来て、大正屋呉服店（現平和公園レストハウス）の支配人をしていた。戦後、金座街に呉服店を構え、若狭さんは3代目。5歳まで店に住んでいたが、小町に自宅ができ、そこで子供時代を過ごす。店の前の路上でよく落書きしたことを思い出すという。

大学時代に広島を離れただけで、卒業後すぐにわかさ屋呉服店に入社する。生粋の広島人である。

### ☆中振連の活動とセトラひろしま設立の経緯

1984年に金座街商店街振興組合の青年部会に入り、勉強会を通じて商店街活動の意識が変わる。特に1987年、熊本の上通商店街を視察した時、各商店街の垣根を越えて行政を巻き込んだイベントを行っており、商店街が街を動かしていることに衝撃を受ける。

早速、横の連携を図るため、中央部商店街間で「青年部懇親会」を設け、駐車場不足を解消するための対策等を検討する。広島市中央部駐車場システム事業を開始し、1992年にその運営母体として広島市中央部商店街振興組合連合会（略称：**中振連**）が発足する。

一方で、フラワーフェスティバルに対抗して実施されていた「GOGOひろしま春まつり」（主催：広島テレビ他）が1997年に中振連に引き継がれ、「ひろしま春まつり」としてリニューアルスタート。そこに石丸良道氏（セトラひろしまの中心人物）等のまちづくりのボランティア・グループが参画する。

1999年秋に世間を騒がせた暴走族事件が起こり、そのあおりで「ひろしま春まつり」も中止となる。ボランティア・グループの行き場がなくなり、その受け皿としてまちづくり組織「**セトラひろしま**」を発足させ、2003年にNPO法人の認定を受ける。

＊セトラとは、広島市中央部地域を意味するセンターエリアの略語

### ☆セトラひろしまの運営

ミッション遂行型のNPOで、働いて稼ぐのが基本。イベント等は中振連から請け負って実施している。アリスガーデンもアリスカフェの売り上げを中振連に還元して、セトラの活動「アリスガーデンパフォーマンスひろば事業（通称：**AH!**）」に回している。昨年行った「**イノコ大福フェスタ**」も中振連が国から補助金をもらい、セトラが実施。周りからセトラは裕福な組織と思われているが、内実は自転車操業という。

商店街の活動は土地に縛られているので、基本的に外に出れないが、セトラはテーマ型なので活動範囲が自由である。出前アートも可能だし、「明日の神話」の誘致や「新藤兼人の百年の軌跡」開催の事務局もやった。

### ☆これからの目標

まちづくり会社までいかななくても、中振連、セトラの枠を超えた活動を行いたい。地域コミュニティとの関わりを深めていくためには商店街に住む人を増やしていく必要がある。一つの理想形として高松丸亀町商店街がある。低層階を店舗、その上を住居や医療・介護施設にして、そこで一生を過ごせる。これぞコンパクト・シティのモデルであろう。

地権者が多く、地価が高く、利害関係が複雑な本通では高松のようにはいかないが、本通ヒルズのような合築の機運が広がっていけば可能ではないか。

▼セトラひろしまのホームページ：<http://www.cetra.jp/npo/gaiyou.htm>

＊コメント＊ まちづくりに対する熱い思いが伝わってきた。広島のを元気にするためには中央部が元気であればというビジョンを掲げて中振連とセトラが一体となって先導している。ますますの活躍を期待したい。

聞き手：編集委員 前岡智之、瀧口信二（文責）



略歴：1956年広島生まれ、1978年関西学院卒、わかさ屋呉服店入社、現在、セトラひろしま代表、広島市中央部商店街振興組合連合会専務

## ○こまちなみシリーズ①

金沢市は「こまちなみ保存条例」を制定し、「まちの歴史を色濃く残した、ちょっとした良い町並み」を「こまちなみ」として守り、育て、その雰囲気を生かした風格あるまちづくりを進めている。そこで、これに倣って、広島における残しておきたい「こまちなみ」を探访し、シリーズで紹介する。

### 横川駅界隈がおもしろい！

第一弾はＪＲと広島電鉄の横川駅界隈です。東京で言えば八丁堀、紙屋町、本通りが銀座、広島駅周辺が東京駅そして横川が新宿といったところでしょうか？規模は比べものになりませんが、ガード下の店舗、飲食店等など、ある種の猥雑感は似ているのではないのでしょうか？

駅周辺には４つの商店街があります。広島信用金庫横川支店を中心に戦前からの老舗専門店も残る「横川駅前商店街」。昭和２８年に広島初のアーケードが設けられた「くろすろーど」、フタバ図書創業の地でもあり、駅に近く人通りが絶えることはありません。くろすろーどの東側、１３０ｍの小町並みは「星のみち」です。ここには飲食店が多く軒を連ね、昼からイッパイやって上機嫌の人も見かけます。夜になると路面に埋め込まれた星座の模様が浮かび上がります。昭和３８年、山陽本線の高架化に伴って出来たのが「新宿商店街」。居酒屋系が多く、ＪＲ横川駅北口に近いため、夜になると仕事帰りの人でにぎわいます。



星のみち

横川の地名は太田川の本支流が南北に流れるのに対して、唯一横（東西）に流れる川があったことから付いたといわれています（太田川放水路整備で埋め立てられた）。「こまちなみ」もほとんど“横”、東西方向で幅４ｍの道を行き来するのは人と自転車、酔っ払って少々ふらついていても大丈夫なんです。ホントこんな小路、小道が少なくなりましたね。

店舗を構えているのは飲食系ばかりではありません。美容室、衣料品店、質屋、食料品、薬局など…。そして昨年６月には古本屋さんがオープン、その名も「本と自由」。店舗面積は広くはないものの映画、演劇など専門性の高い本が棚にぎっしり。コーヒーも飲めて、夜遅くまで店主と「文学論」を戦わす人もいます。そして忘れてならないのが映画館「横川シネマ」、シネコンが主流の中にあって昔ながらの雰囲気の館です。支配人の溝口徹さんは「一流館と競争しても客は来てくれない。質の高いドキュメンタリー中心に掛けている。お客は遠方からも来られるが、アクセスの良さに驚いておられる」、横川の町について「普段着の町ですね」と。横川商店街振興組合によると「３０、４０代の若い人から空き店舗はないか」との問い合わせも多いとのこと。（編集委員 三宅恭次）

## ○読者からの投稿その１

投稿者 柴田直美（広島市民）

前号は「ひろしまジン大学」の記事がためになりました。と、いうのも私は近所に住んでいて、ときどき事務所の近くを通るのですが、人がいるときは、なんとなく、学校の文化祭か体育祭の準備をしている感じで、若い人が集まっているので、何をしているのかな？と気になっていました。

横川駅近くには、モザイクという小さなギャラリーがあって、そこで、ひろしまジン大学の本の交換市（旧日銀で開催）の宣伝をしていたこともありました。ギャラリーのモザイクは、若いアーティストさんの展示が多く、楽しいですよ。機会がありましたら、のぞいてみてください。



## ○読者からの投稿その2

昨年秋口に、37年ぶりに東京から広島に戻り、30数年にわたって産官学や産学プロジェクト、国際プロジェクトを手掛けてきたスキルやノウハウを生かし、少しでも広島を元気にするプランや仕組みを構築したいという井上英之氏からの投稿2件目である。

### NP0 設立による「緑の伝言プロジェクト」の拡大と継承に関する提案

投稿者 井上英之（マーケティングプロデューサー）

広島市に残る爆心地から2km以内55ヶ所170本の被爆樹は、生き延びることで被爆の実相を語り、惨禍を乗り越えてきた復興と希望の証である。

緑の伝言プロジェクトは、その被爆樹の認知拡大を図る新聞全面広告を中心とする広報活動と、実際の被爆樹を樹木医とともに回る小規模（20～30人）のツアーを年1回実施してきた。

これまで蓄えられてきた知見を活かし、今後も活動を継続的に進めていくために、2015年被爆70周年を迎えるタイミングで、活動の主催団体となるNP0を立ち上げ、被爆樹に関する保存・樹勢回復措置業務、サイン制作・設置・情報提供ツール制作業務、知見のアーカイブ化、樹木医の後継者育成等を行う体制を構築する。

そのために、以下のような活動を行い、参加者等の寄付を募り活動資金とする。

1. 原爆ドーム及び平和記念資料館見学に、被爆樹見学や被爆建物見学等を盛り込んだ「ピース・ツアー・プログラム」を整備し、修学旅行、外国人旅行者にツアー参加を促し、参加費用の一部を寄付していただく。
2. これまで、蓄えてきたビジュアルを活用してポストカードやTシャツ等の記念グッズを制作し、ツアー参加者を中心に販売し、一部を寄付とする。
3. 被爆樹の苗を、東北被災地街並み復興へ、といったキャンペーンを実施し、集まった寄付金の一部をいただく。

## ○お知らせ：「時代を語り建築を語る会（第5回）」（語り人 大田晋氏）開催

今回は、広島育ちで広島への思いが熱い、元広島市助役の大田晋氏（現川崎医療福祉大学教授）を招き、当時携われた「広島の都市美づくり」について語っていただく。

大田氏は1980年に厚生省から広島市企画課長として3年間在任し、荒木市長の下で全国に先駆けて「広島市都市美計画」策定の中心的役割を果たす。この計画のもとに広島市は「美しいまち広島」の都市づくりを目指して取り組んでいる。

当時の計画策定の苦労話等、過去・現在・未来にわたり語っていただく。参加者からの質問にも答えていただき、自由な意見交換を予定しているので、ふるって参加ください。



- ・開催日時：2014年5月23日（金）18:00～20:00
- ・会場：広島市まちづくり市民交流プラザ、研修室C（北棟5階）
- ・会費：1000円（資料費・会場費）、学生・院生は無料
- ・参加者定員：当日先着50名
- ・参加申込先：担当幹事 高東博視  
メールアドレス：takatoh@ms9.megaegg.ne.jp
- ・主催：時代を語り建築を語る会実行委員会（代表 石丸紀興）

## □編集後記

今回は、公共空間と民間が協働することにより見事に実現したRCC文化センターのフットパスについて、報告いただきました。これからのまちづくりの手法として大変参考になりました。これまでのしがらみやルールの中でとらわれがちな事も、集まる人の知恵と工夫により解決していけるものです。

このメルマガも記事が多彩になってうれしい限りですし、愛読者も500名近くとなりました。いろいろな場面でまちづくりを考えておられる人達との交流も始まっています。これからも元気にマガジンづくりに邁進していきます。読者のみなさん、お知り合いにこのマガジンを紹介して、仲間を増やしてください。

(編集委員 前岡智之)

## \*ひろしまのまちづくりについて

**皆さんの自由な提案・意見をお聞かせください！**

(投稿は500字程度以内をお願いします)

### 編集委員

|      |                    |
|------|--------------------|
| 石丸紀興 | 広島諸事・地域再生研究所主宰     |
| 高東博視 | 心豊かな家庭環境をつくる広島21理事 |
| 瀧口信二 | 広島アイデアコンペ実行委員会事務局  |
| 通谷 章 | ガリバープロダクツ代表        |
| 前岡智之 | 中国セントラルコンサルタント代表   |
| 三宅恭次 | ひろしまコミュニティカレッジ代表   |